

M3LDY-A / M3LDY-B 用

PC Configurator

(M3LDYCON)

取扱説明書

1.	M3LDYCON のインストール.....	3
1.1.	M3LDYCON 動作環境.....	3
1.2.	M3LDYCON インストール手順.....	3
1.3.	M3LDYCON 起動方法.....	4
1.4.	M3LDYCON 使用上の注意.....	4
2.	M3LDYCON PC Configurator の操作.....	5
2.1.	M3LDY との接続.....	6
2.2.	モニタリング.....	7
2.2.1.	デバイスモード表示.....	7
2.2.2.	デバイスの状態表示.....	7
2.2.3.	バーグラフ表示およびトレンド表示.....	9
2.3.	入力情報の設定.....	10
2.4.	デバイスの詳細情報の設定.....	11
2.4.1.	ローカット機能.....	12
2.5.	出力情報の設定.....	13
2.6.	ワンステップ校正.....	14
2.7.	出力のトリミング.....	15
2.7.1.	下方レンジポイントの DAC トリミング (ゼロ調整).....	15
2.7.2.	上方レンジポイントの DAC トリミング (スパン調整).....	15
2.7.3.	工場出荷時設定に戻す方法.....	16
2.8.	入力センサー校正.....	17
2.9.	診断の実行.....	19
2.10.	カスタムリニアライズの定義.....	20
2.11.	ファイル操作.....	23
2.11.1.	デバイスとの操作.....	24
2.11.2.	ファイルとの操作.....	25
2.11.3.	データの設定変更.....	26
2.11.4.	データの比較.....	27
2.12.	トラブルシューティング.....	28
2.12.1.	COM ポートのコンフィギュレーション.....	28

1. M3LDYCON のインストール

1.1. M3LDYCON 動作環境

M3LDYCON の動作に必要な環境は以下の通りです。

- ・ IBM PC/AT 互換 PC, Pentium 120 MHz プロセッサの PC (266 MHz Pentium II 以上を推奨)
- ・ CD-R/ROM ドライブ
- ・ Microsoft Windows 98SE, NT 4.0, 2000 または XP Pro
- ・ Windows 98SE では 24 MB の RAM、Windows NT/Windows 2000/Windows XP では 48 MB の RAM
- ・ ハード・ディスク空き容量: 30 MB
- ・ 800×600 Super VGA の 15 インチ・モニタ(1024x768 Ultra VGA の 17 インチ以上を推奨)
- ・ Serial Port(COM1、COM2)
- ・ PC スペック形変換器用非絶縁 Cable

1.2. M3LDYCON インストール手順

以下に従って M3LDYCON(M3CON PC Configurator CD)インストールします。本ツールは、Agilent 社製 VEE Pro を用いて開発されています。従って、最初に Agilent VEE Pro 6.2 RunTime バージョン[VEE Pro]と[IO Lib]をインストールする必要があります。すでに、インストールされている場合には、[VEE Pro]と[IO Lib]のインストールは省略することができます。

Windows を起動します。

M3CON のセットアップディスクを CD-ROM ドライブに挿入します。

自動的にインストール用画面が表示されます。

注 自動的にインストール画面が表示されない時は、Disk:%Setup.exe を起動してください。インストール用画面が表示されます。

注 インストール先はデフォルト値を使い、変更しないでください。

[VEE Pro]ボタンをクリックします。

Agilent VEE Pro 6.2 RunTime のインストールが始まります。

画面に表示されるメッセージにしたがって、[Next]ボタンまたは[Yes]ボタンをクリックします。

最後に[Finish]ボタンをクリックして、インストールを終了します。

[IO Lib]ボタンをクリックします。

Agilent IO Libraries のインストールが始まります。

画面に表示されるメッセージにしたがって、[Next]ボタンまたは[Yes]ボタンをクリックします。

インストール途中の[Select the Installation Option]の選択画面では、[Runtime Installation]を選択してください。

インストール終了時の[Agilent IO Libraries runtime have been successfully installed.]の画面では、[Run IO Config.]にチェックし、[Finish]ボタンをクリックしてください。[Agilent IO Libraries Configuration – IO Config]の画面が現れますので、[*Auto Config.]ボタンをクリックしてください。

最後に[OK]ボタンをクリックして、インストールを終了します。

[M3LDYCON] ボタンをクリックします。

M3LDYCON ソフトウェアのインストールが始まります。

画面に表示されるメッセージにしたがって、[次へ]ボタンをクリックします。

[完了]ボタンをクリックして、インストールを終了します。

[Exit] ボタンをクリックします。

インストール用画面が終了します。

以上で M3LDYCON のインストール作業が終了します。

1.3. M3LDYCON 起動方法

PC と M3LDY とを、PC スペック形変換器用非絶縁ケーブルで接続します。

Windows の <スタート> - <プログラム> - <M3LDYCON> を実行します。

1.4. M3LDYCON 使用上の注意

M3LDY-B に関しては、PC 上で参照することはできませんが、コンフィギュレーションに関わる設定操作はできません。従って、設定に関わるボタン表示は、マスク表示され、操作できないようになっています。

M3LDY-B で可能な操作は、データの参照、ワンステップキャリブレーション、出力のゼロ・スパン調整および出力テストなどです。

2. M3LDYCON PC Configurator の操作

M3LDYCON を起動すると図 1 の起動画面が表示されます。ツールの操作を有効にするには、M3LDY デバイスと PC を PC スペック形変換器用非絶縁ケーブルで接続する必要があります。

図 1 起動直後の画面



M3LDY PC Configurator

2.1. M3LDY との接続

“ Connect ” ボタンを押すと、図 2 のような接続操作画面が表示されます。

図 2 接続操作画面



“ COMM Port ” で接続ポートを選択します。

“ Connect Device ” ボタンを押すと、M3LDY との接続を行い、デバイスの設定情報をアップロードし、接続操作画面を終了し、図 3 のモニタリング画面になります。この画面をベースに種々のコンフィギュレーション操作を行うことができます。

“ Disconnect Device ” ボタンを押すと、接続中のデバイスとの接続を切断します。

“ Close Device Connection ” で接続操作画面を終了させることができます。

2.2. モニタリング

デバイスとの接続が成功すると、図3のようなモニタリング画面になります。種々のコンフィギュレーションが可能になります。

図3 モニタリング画面



2.2.1. デバイスモード表示

“ Device Mode ” では、デバイスの種々の動作モードと PC との通信状態が表示されます。

“ COM ” ランプが点滅している場合には通信が正常に行われていることを示します。

“ DIP ” または “ PC ” で、デバイスのコンフィギュレーションモードが、PC か DIP スイッチであるかを示します。

“ Z/S ” ランプが赤色点灯すると、デバイスはゼロ・スパン調整モードであることを示します。

“ IRG ” ランプが赤色点灯すると、デバイスは、入力のワンステップ校正モードであることを示します。

“ ORG ” ランプが赤色点灯すると、デバイスは、出力のワンステップ校正モードであることを示します。

“ CFG ” ランプが赤色点灯すると、デバイスは、コンフィギュレーション上のデータの変更があったことを示します。不揮発メモリに保存されると消灯します。

2.2.2. デバイスの状態表示

“ Device Status ” では、デバイスの動作状態をランプで表示します。

“ OVR ” ランプが赤色点灯すると、デバイスが入力値異常（ADC 測定レンジオーバーフローまたはアンダーフロー）を検知したことを示します。

M3LDY PC Configurator

“ ADC ”ランプが赤色点灯すると、ADC のハードウェアエラーが発生していることを示します。

“ LOW ”ランプが黄色点灯すると、ローカット機能が働き、ローカット状態であることを示します。ローカット状態でない場合には緑色点灯しています。

“ AFX ”ランプは、アナログ出力モードを示します。消灯であれば通常の動作モードで、出力値は入力値に連動します。赤色点灯は、出力固定モードを示し、出力は入力値には関わらず一定の値を保持します。出力固定モードは出力のループテスト時に使用します。

“ AOS ”ランプは、アナログ出力値が正常範囲にあれば、緑色点灯ですが、出力値が上方または下方に飽和すると点灯します。

“ PV ”ランプは、センサー入力が、入力レンジ内にある場合には、緑色点灯ですが、入力レンジ外になった場合には赤色点灯します。

M3LDY PC Configurator

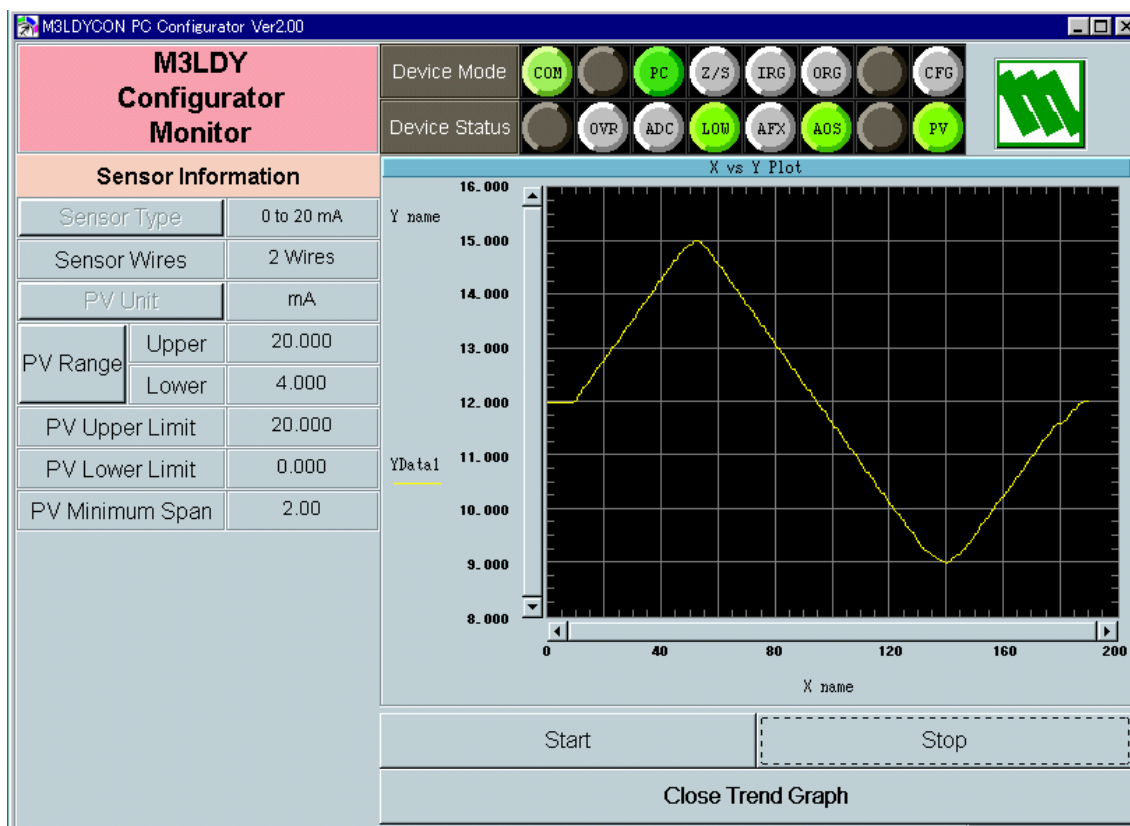
2.2.3. バーグラフ表示およびトレンド表示

PV値(工業単位表示)、PV%値(設定レンジに対するPV値を%表示)、アナログ出力%値およびアナログ出力値(工業単位表示)をバーグラフ表示します。アナログ出力%値は、PV%値に対して入出力変換関数(デバイス詳細情報の Xfer Function 参照)を施した結果になります。入出力変換関数が LINEAR の場合には、アナログ出力%値はPV%値に一致します。

PV値およびアナログ出力値のグラフ目盛値は、設定レンジに固定されますが、PV%値及びアナログ出力%値は、変更することもできます。

バーグラフに対応する“Graph”ボタンを押すと、それらの値をトレンド表示することができます。例えば、“PV Graph”ボタンを押すと、図4のような画面になり、“Start”ボタンを押すとトレンド表示が開始されます。“Stop”ボタンで停止します。“Close”ボタンでトレンド表示を終了します。

図4トレンド表示



2.3. 入力情報の設定

図 3 のモニタリング画面の左側にデバイスの入力基本設定情報が表示されています。

“ Sensor Type ”には、入力センサーのタイプを表示します。M3LDY では、4 ~ 20 mA DC 入力のみで変更することはできません。

“ Sensor Wires ”には、現在のワイヤリングが表示されます。M3LDY では、2 線式の DC 入力なので、変更することはできません。

“PV Units”には、PV 値の工業単位を表示します。入力センサーのタイプで、工業単位は mA 固定になっていますので変更できません。

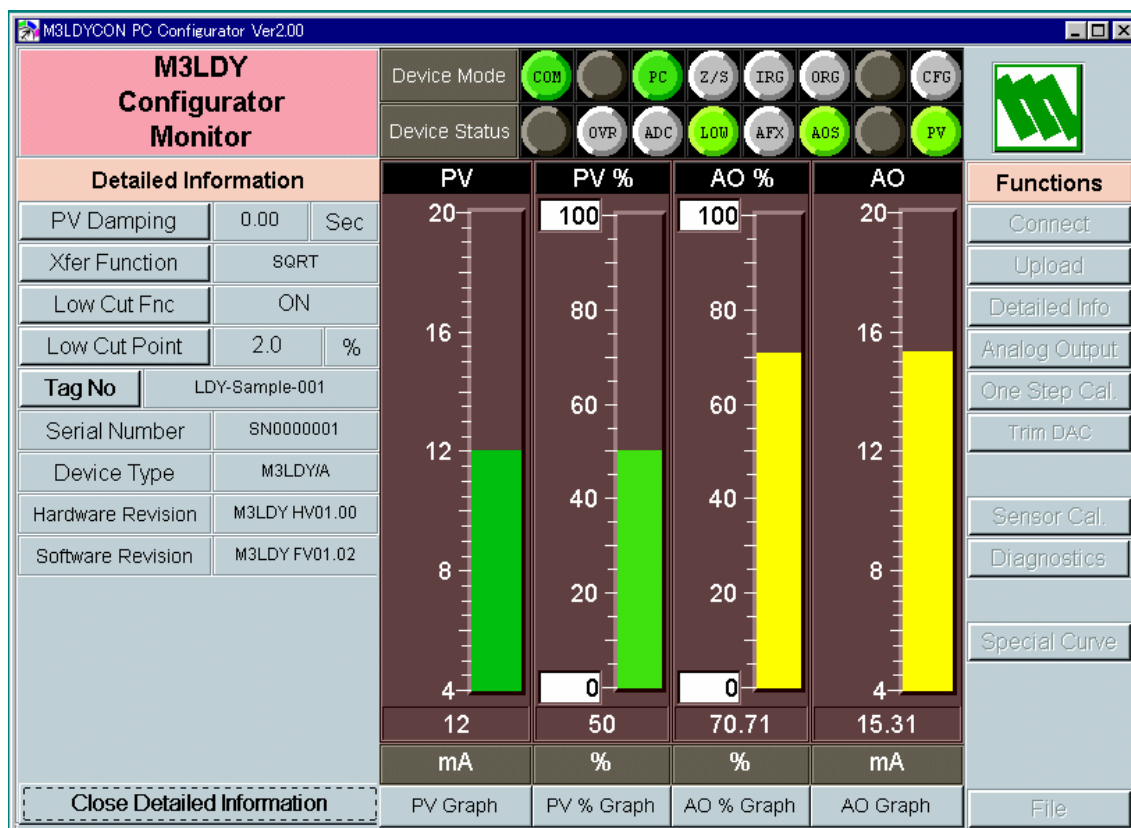
“ PV Range ” ボタンで、入力レンジを設定できます。

“ PV Upper Limit ”、“ PV Lower Limit ” および “ PV Minimum Span ” に設定可能なレンジの上下限值と最小スパン値が表示されます。

2.4. デバイスの詳細情報の設定

図 3 モニタリング画面で、“ Detailed Info ” ボタンを押すと、図 5 のような詳細設定画面が表示されます

図 5 デバイス詳細設定画面



“ PV Damping ”ボタンで、入力の1次フィルタリング時定数を設定できます。設定範囲は、0.5 秒から 30 秒です。フィルタリングを行わない場合には、0 秒を設定します。

“ Xfer Function ” ボタンで、入力対出力への変換関数の設定を行うことができます。M3LDY では、“ LINEAR ”、“ SQRT ” および “ SPECIAL CURVE ” をサポートします。

“ SPECIAL CURVE ” はユーザ指定のカーブで、あらかじめ定義されている必要があります。未定義の場合には、エラーとなります。定義方法は 2.10 カスタムリニアライズの定義を参照してください。

“ Low Cut Fnc ” ボタンで、ローカット機能を有効 (ON) にするか、無効 (OFF) にするかを設定することができます。

“ Low Cut Point ” ボタンでは、ローカットポイントを、入力レンジの%値で設定します。設定範囲は、0~100%です。

“ Tag No ” ボタンで、デバイスのタグ番号を設定できます。16文字以内の任意の文字列が設定できます。

“ Serial Number ” には、本デバイスのシリアル番号が表示されます。

“ Device Type ” には、デバイスの形式が表示されます。

“ Hardware Revision ” には、デバイスのハードウェアバージョンが表示されます。

“ Software Revision ” には、デバイスのソフトウェアバージョンが表示されます。

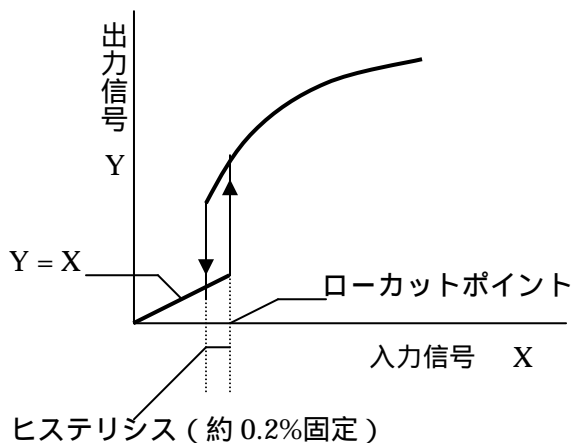
“ Close Detailed Information ” で、詳細設定画面を終了します。

2.4.1. ローカット機能

“ Low Cut Fnc ” が “ ON ” の場合に、入力値が “ Low Cut Point ” で設定したローカットポイント以下になると、出力値はローカットされます。ローカット動作は、“ Xfer Function ” で指定された入出力関数によって異なります。また、ローカット動作は、約 0.2% (固定) のヒステリシスを持っていますので、安定な動作をします。

“ SQRT ” の場合

ローカットポイント以下は、入力値に比例した直線で出力されます。下図参照。



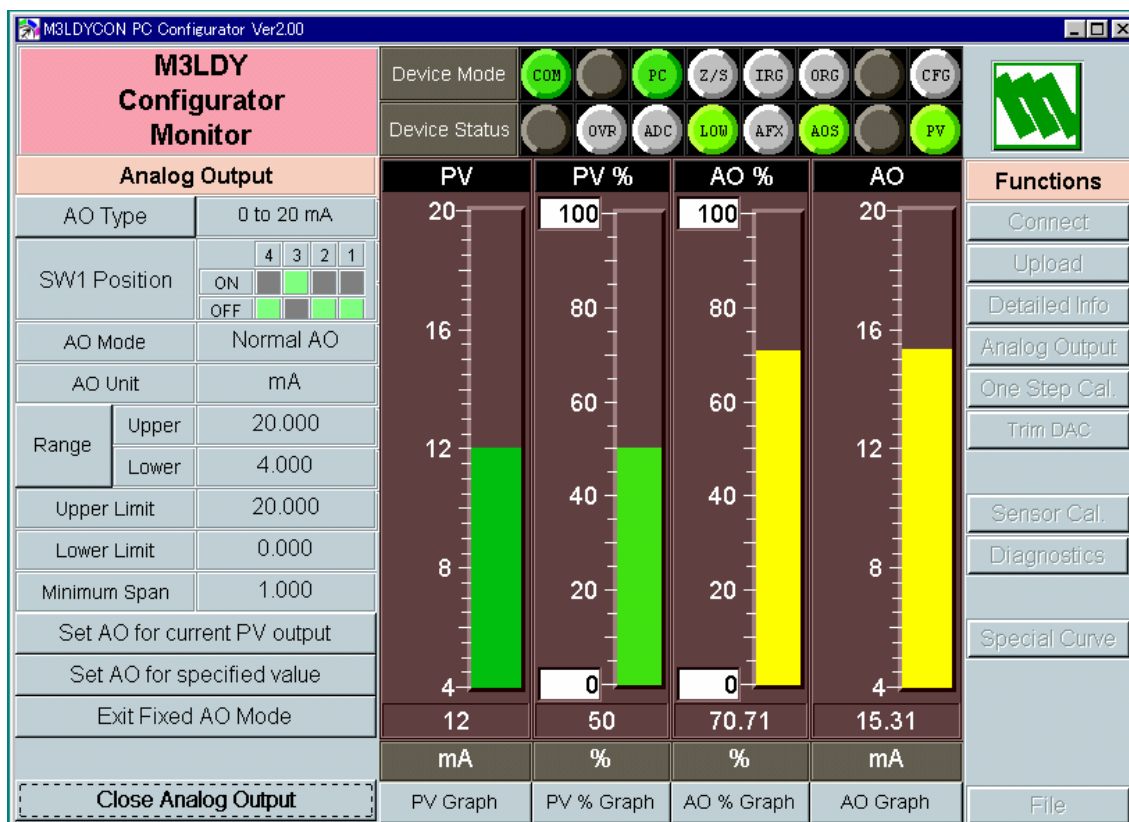
“ SQRT ” 以外の場合

ローカットポイント以下は、0 % 値が出力されます。

2.5. 出力情報の設定

“ Analog Output ” ボタンを押すと、図 6 のような、出力情報設定画面が表示されます。

図 6 出力情報設定画面



“ AO Type ” ボタンで、出力のタイプを変更することができます。

“ SW1 Position ” に、設定出力タイプのための、SW1 のスイッチポジションを示しますので、デバイスのスイッチポジションを確認ください。

“ AO Mode ” には、出力のモードを表示します。通常は、“ Normal AO ” と表示されます。

“ AO Unit ” には、出力の実量単位が表示されます。

“ Range ” ボタンで、出力のレンジを設定することができます。

“ Upper Limit ”、“ Lower Limit ” および “ Minimum Span ” に設定可能なレンジの上下限值と最小スパン値が表示されます。

“ Set AO for current PV output ” ボタンで、現在の出力値で出力を固定します。

“ Set AO for specified value ” ボタンで、出力値をレンジ内の任意の値に固定することができます。これらを用いて出力ループのテストを行うことができます。

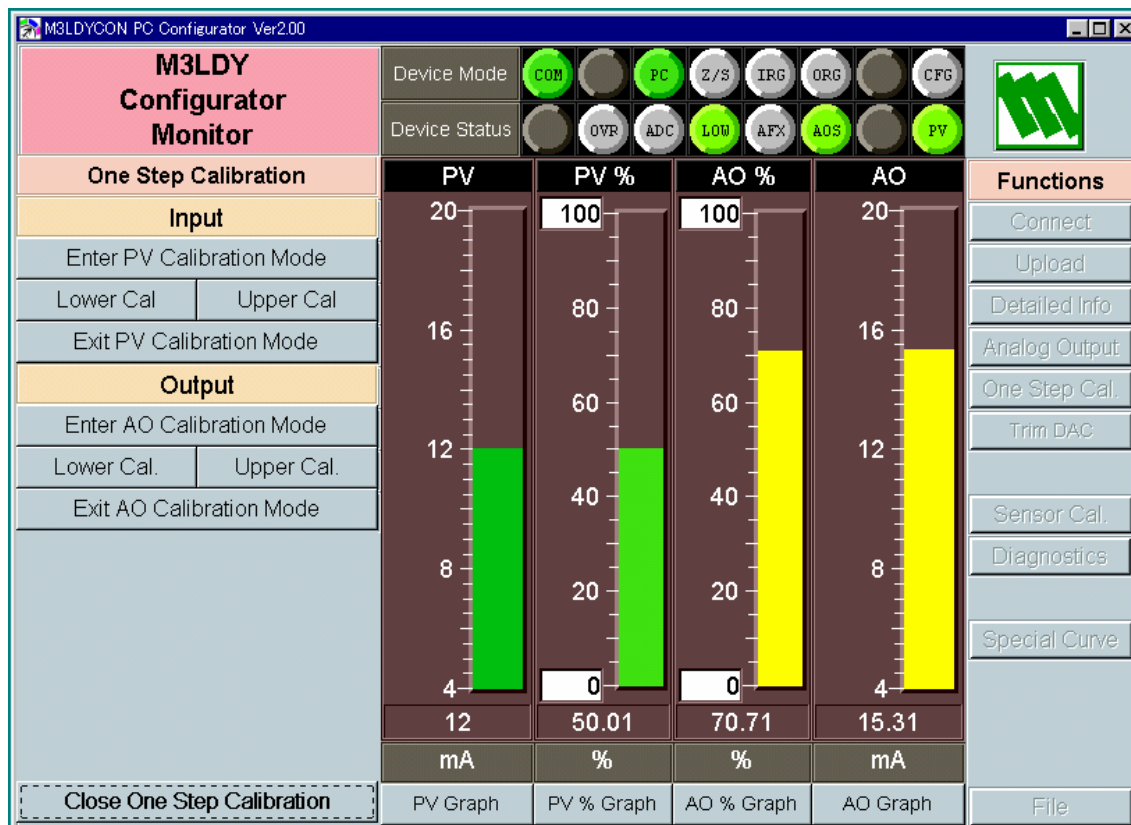
“ Exit Fixed AO Mode ” ボタンで、出力固定モードを終了させ、通常出力モードにします。

“ Close Analog output ” ボタンで、出力情報設定画面を終了させます。

2.6. ワンステップ校正

“ One Step Cal. ” ボタンを押すと、図7のようなワンステップ校正画面が表示されます。ワンステップ校正とは、校正用測定器を用いて、スケーリング（レンジ設定）を行うもので、入力および出力に関して行うことができます。

図7ワンステップ校正画面



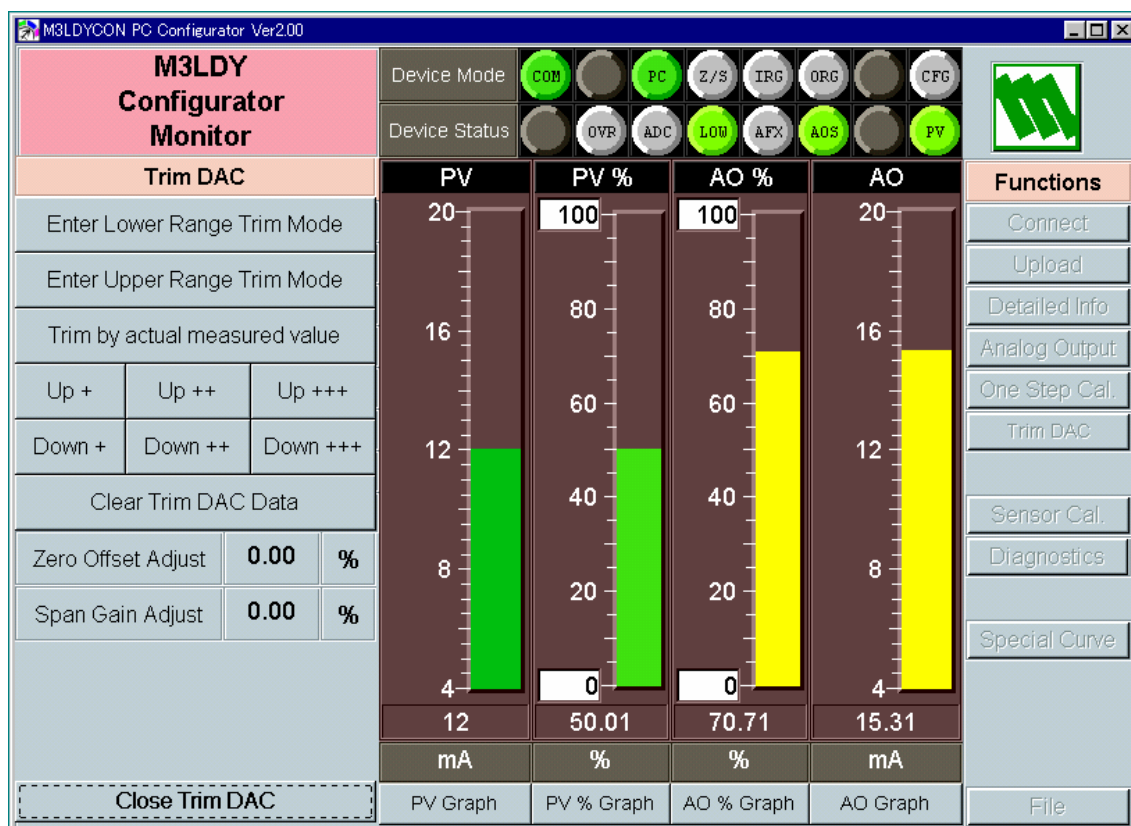
入力のワンステップ校正を行うには、“ Enter PV Calibration Mode ” をクリックし、入力ワンステップ校正モードにします。入力ワンステップ校正モードになると“ Device Mode ”の“ IRG ”ランプが赤色点灯します。0%値または100%値の入力を加え、対応する“ Lower Cal ”または“ Upper Cal ”を押すと、自動的に入力のスケールの値が決定されます。校正が終了したなら“ Exit PV Calibration Mode ”を押して、校正モードを解消してください。出力のワンステップ校正を行うには、“ Enter AO Calibration Mode ” をクリックし、出力ワンステップ校正モードにします。出力ワンステップ校正モードになると“ Device Mode ”の“ ORG ”ランプが赤色点灯します。出力が0%または100%の出力値になるように入力を調整し、対応する“ Lower Cal ”または“ Upper Cal ”を押すと、自動的に出力のスケールの値が決定されます。校正が終了したなら“ Exit AO Calibration Mode ”を押して、校正モードを解消してください。

“Close One Step Calibration”ボタンで、ワンステップ校正画面を終了します。

2.7. 出力のトリミング

“ Trim DAC ” ボタンを押すと、図 8 のような DAC トリミング画面が表示されます。出力のゼロ・スパン調整を行うことができます。

図 8 DAC トリミング画面



2.7.1. 下方レンジポイントの DAC トリミング (ゼロ調整)

“ Enter Lower Range Trim Mode ” ボタンを押すと、デバイスは下方レンジ値 (0 % 値) を固定出力します。計測器等で出力値を測定します。“ Trim by actual measured value ” ボタンを押して、実測値を設定することによりゼロ調整を行うことができます。実測値との誤差が大きい場合には、“ Trim by actual measured value ” ボタン操作を繰り返します。または、“ Up ” または “ Down ” ボタンを押すことで出力値を上方または下方に動かすことで微調整できます。“ + ”、“ ++ ” または “ +++ ” で微調量が変わります。現在の微調整の結果が “ Zero Offset Adjust ” に表示されます。表示単位は%で、-15%から+15%の範囲で微調整可能です。

2.7.2. 上方レンジポイントの DAC トリミング (スパン調整)

“ Enter Upper Range Trim Mode ” ボタンを押すと、デバイスは上方レンジ値 (100 % 値) を固定出力します。計測器等で出力値を測定します。“ Trim by actual measured value ” ボタンを押して、実測値を設定することによりスパン調整を行うことができます。実測値との誤差が大きい場合には、“ Trim by actual measured value ” ボタン操作を繰り返します。または、“ Up ” または “ Down ” ボタンを押すことで出力値を上方または下方に動かすことで微調整できます。“ + ”、“ ++ ” または “ +++ ” で微調量が変わります。現在の微調整の結果が “ Span Gain Adjust ” に表示されます。表示単位は%で、-15%から+15%の範囲で微調整可能です。

M3LDY PC Configurator

調整可能です。

2.7.3. 工場出荷時設定に戻す方法

“ Clear Trim DAC Data ” ボタンで、DAC トリミング値を全て消去し、初期状態に戻すことができます。初期状態では、“ Zero Offset Adjust ”は 0.0%、“ Span Gain Adjust ”は 0.0%です。

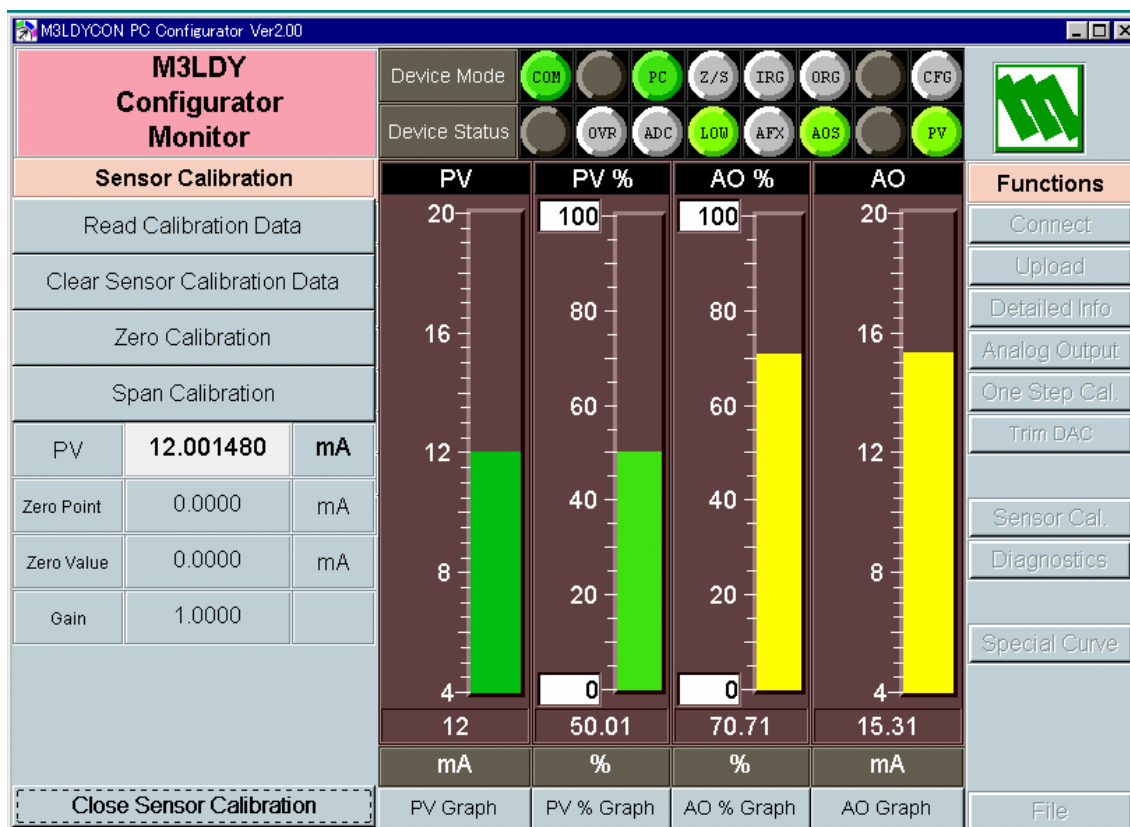
“ Close DAC Trimming ” ボタンで、DAC トリミング画面を終了します。

2.8. 入力センサー校正

M3LDY では、センサーの入力値校正を、行うことができます。ゼロ校正では、校正点での誤差をオフセット値とし、校正します。スパン校正では、校正点での誤差を、ゼロ校正点との傾き（ゲイン）として校正します。但しゲイン(Gain)の大きさは、 $0.1 \leq \text{Gain} \leq 10.0$ の範囲でなければなりません。校正ポイントは、ゼロ校正、スパン校正とも測定可能レンジ内の任意の点で行えます。

“ Sensor Cal. ” ボタンを押すと、図9のような、センサー校正画面が表示されます。

図9 センサー校正画面



“ PV ” に現在の測定値が、詳細に表示されます。この測定値を見ながら、校正作業を行います。校正結果が測定値に反映されるまで、数秒必要です。

ゼロ校正ポイント値の入力を加えた後、“ Zero Calibration ” ボタンを押して、真値（校正値）を設定します。ゼロ校正がなされ、校正結果が P V 値に反映されます。ゼロ校正時点の、センサーの校正前のデータが “ Zero Point ” に、校正後のデータが “ Zero Value ” に表示されます。

スパン校正ポイント値の入力を加えた後、“ Span Calibration ” ボタンを押して、真値（校正値）を設定します。スパン校正がなされ、校正結果が P V 値に反映されます。スパン校正時点での、ゼロ校正ポイントとのゲイン（傾き）が “ Gain ” に表示されます。

“ Read Calibration Data ” ボタンで、センサー校正値である、“ Zero Point ”、“ Zero Value ” および “ Gain ” を呼び出し表示します。

“ Clear Sensor Calibration Data ” ボタンで、センサー校正値を消去し、工場出荷時値に

M3LDY PC Configurator

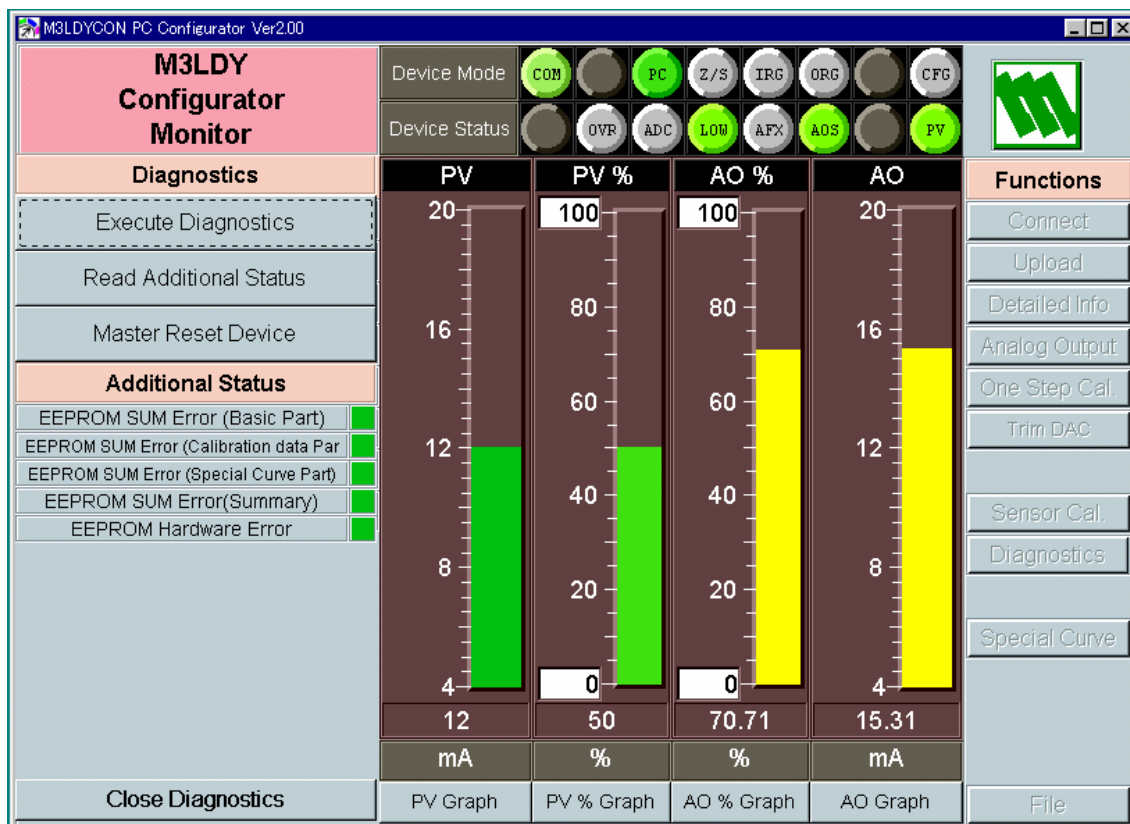
します。工場出荷時値は、Zero Point = Zero Value = 0、Gain = 1.0 になります。センサータイプを変更した場合、センサー校正データは、自動的に工場出荷時値になります。

“ Close Sensor Calibration ” で、センサー校正画面を終了します。

2.9. 診断の実行

“Diagnostics” ボタンを押すと、図 10 のような診断実行画面が表示されます。

図 10 診断実行画面



“Execute Diagnostics” ボタンを用いて、デバイスの診断を行うことができます。診断の結果は Additional Status 表示欄に表示されます。Additional Status 表示欄では、デバイスの Additional Status の各項目とその内容(状態)が表示されます。正常時は緑色表示で、異常時は赤色表示です。

“Read Additional Status” ボタンで、現在の Additional Status の内容をデバイスから読み出して表示させることができます。

“Master Reset Device” ボタンで、デバイスへの電源を OFF/ON することなくデバイスをリセットスタートすることができます。

“Close Diagnostics” ボタンで、診断実行画面を終了します。

2.10. カスタムリニアライズの定義

M3LDY は、Xfer Function としてユーザ指定のカスタムリニアライズ (SPECIAL CURVE) をサポートしています。SPECIAL CURVE を使用するためには、リニアライズ の特性データをあらかじめ M3LDY に定義、登録しておく必要があります。特性データは、テキストファイルとして定義します。定義フォーマットは以下のようになります。特性データは“ { ”から“ } ”の内に記述します。データは、X、Y の組み合わせで定義し、単位は % 値です。設定可能最大ポイント数は 101 点です。

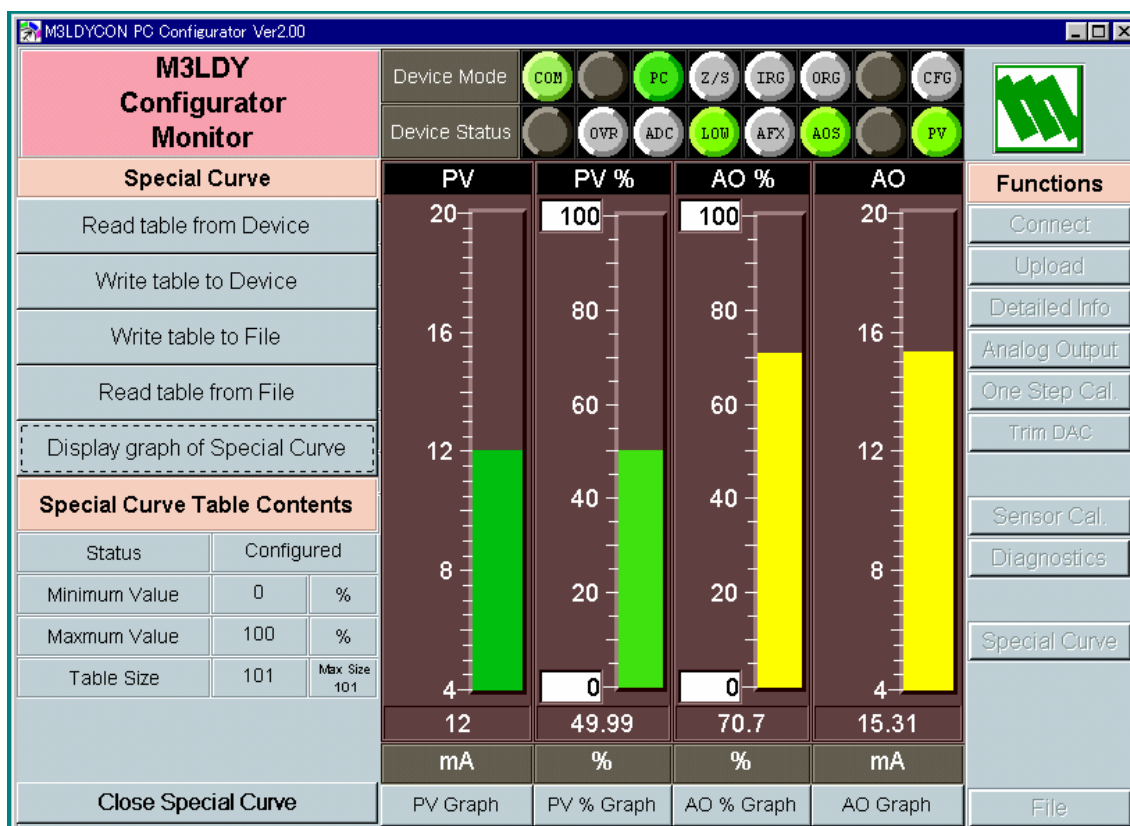
```
/*
*****
/*      Linearization Table( Special Curve ) Definition
/*      Yi = f(Xi)   ( 0 <= i < Size )
/*              -15<= X, Y <= 115 %
/*              Xi < Xi+1
/*              2<= Size <= 101
/*
*****
{
0.000000,      0.000000          < = 最小 X 値に対する Y の値
:
100.000000,   100.000000       < = 最大 X 値に対する Y の値
}
```

M3LDY PC Configurator

特性データの準備ができたなら、M3LDY に登録します。

“ Special Curve ” ボタンを押すと、図 1 1 のようなリニアライズテーブル設定画面が表示されます。

図 1 1 リニアライズテーブル設定画面



“ Read table from File ” ボタンで、PC 上に定義したファイルから特性データを読み出します。読み出した結果のサマリーが Special Curve Table Contents に表示されます。特性データが 101 点を超える場合には 101 点でカットされます。

“ Display graph of Special Curve ” で、特性データをグラフ表示する事が可能です。(図 1 2 参照)

“ Write table to File ” ボタンで、現在読み出されている特性データをファイルに書き出すことができます。

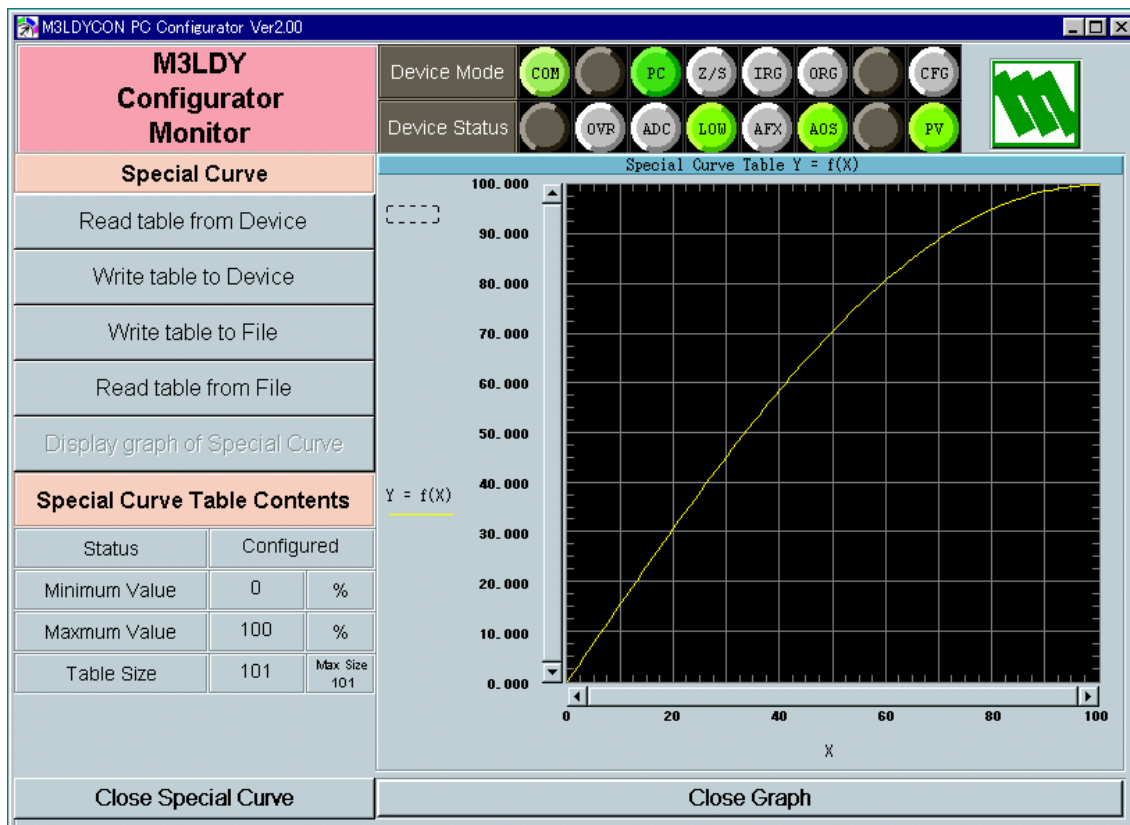
“ Write table to Device ” ボタンで、特性データを M3LDY に書き出します。書き出しが正常に終了すると、Special Curve Table Contents 内の Status が “ Configured ” になり、登録が完了したことを示します。この状態になると、Xfer Function の選択設定で SPECIAL CURVE を設定することが可能になります。既に Xfer Function が SPECIAL CURVE になっている状態では、特性データの書き出しはできません。

“ Read table from Device ” ボタンで、M3LDY に既に登録されている特性データを読み出すことができます。未登録の場合、Special Curve Table Contents 内の Status が “ Non configured ” となります。

“ Close Special Curve ” で、リニアライズテーブル設定画面を終了します。

M3LDY PC Configurator

図 1 2 リニアライズテーブルのグラフ表示



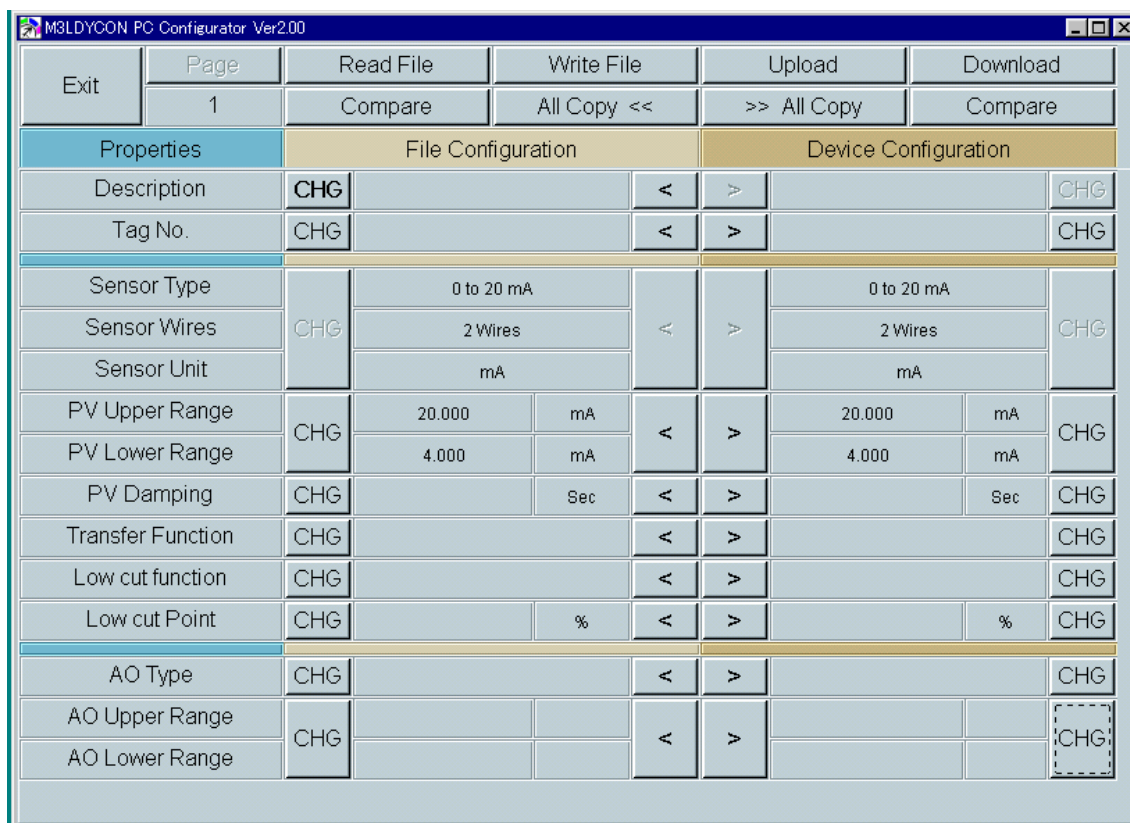
2.11. ファイル操作

ファイル操作では、オフラインでコンフィギュレーション情報設定しファイルに保存したり、設定ファイルから一括してデバイスに設定したり、デバイスの設定情報をファイルに保存したりすることなどが出来ます。“File” ボタンを押すと図 1 3 のようなファイル操作画面が表示されます。この画面を起動すると、カードとの接続は切断状態になります。従って“Upload”、“Download” ボタンの操作中でなければ、カードの着脱は自由に行えます。ファイル操作画面は、大きく分けて 2 つの領域 (“File Configuration”、“Device Configuration”) から構成されています。“File Configuration” 領域には、ファイルとのやりとり (Read/Write) 情報が表示されます。“Device Configuration” 領域には、カードとのやりとり (Upload/Download) 情報が表示されます。

“Exit” ボタンで、ファイル操作を終了します。デバイスとの接続状態は切断のままなので、動作をモニタリングするためには、“Connect” ボタンで再接続する必要があります。

注：レンジ値等の設定では、設定値の妥当性はチェックされませんので、デバイスの仕様書に従って設定してください。また、リニアライズ特性テーブルはファイル操作の対象外です。M3LDY-B に対しては、“Download” はできません。しかし、“Upload” したデータをファイルに格納することや、設定ファイルとの比較をすることはできます。

図 1 3 ファイル操作画面



M3LDY PC Configurator

2.11.1. デバイスとの操作

“ Upload ” ボタンを押すと、デバイスとの接続を行い、コンフィギュレーション情報を読み出します。接続 COM ポートは、“ Connect ” 画面で変更することができます。読み出しが完了すると“ Device Configuration ” 領域に表示します。各データ項目の背景色は初期化されます（図 1 4 ）。

“ Device Configuration ” 領域の“ Description ” データは、カードのファームソフトウェアバージョン番号が表示され、変更することは出来ません。また、“ File ” 領域からのコピーも出来ません。

“ Download ” ボタンを押すと、カードの選択した後カードとの接続を行い、“ Device Configuration ” 領域のコンフィギュレーション情報をダウンロードします。M3LDY-B にはダウンロードすることはできません。ダウンロード中に異常が発生した場合には、ダウンロードを中断し、当該データの背景色が“ Med Pale Red ” になります。正常にダウンロードが終了すると、自動的にコンフィギュレーション情報をアップロードし、データの背景色は初期色になります。

図 1 4 アップロード後の画面

Exit	Page	Read File	Write File	Upload	Download
	1	Compare	All Copy <<	>> All Copy	Compare
Properties		File Configuration		Device Configuration	
Description	CHG	<	>	SN0000001	CHG
Tag No.	CHG	<	>	LDY-Sample-001	CHG
Sensor Type		0 to 20 mA		0 to 20 mA	
Sensor Wires	CHG	2 Wires		2 Wires	
Sensor Unit		mA		mA	
PV Upper Range	CHG	20.000	mA	<	>
PV Lower Range	CHG	4.000	mA	<	>
PV Damping	CHG		Sec	<	>
Transfer Function	CHG			<	>
Low cut function	CHG			<	>
Low cut Point	CHG		%	<	>
AO Type	CHG			<	>
AO Upper Range	CHG			<	>
AO Lower Range	CHG			<	>

M3LDY PC Configurator

2.11.2. ファイルとの操作

“ Read File ” ボタンを押すと、指定ファイルからコンフィギュレーション情報を読み出し、“ File Configuration ” 領域に表示します（図 1 5 ）。データ項目の背景色は初期化されます。

“ Write File ” ボタンを押すと、“ File Configuration ” 領域のコンフィギュレーション情報を指定ファイルに書き出します。“ Description ” データには、当該コンフィギュレーション情報に関するコメントなどを記述（任意の長さの半角英数字文字列）することが出来ます。

図 1 5 ファイル読み出し後の画面

Exit	Page	Read File	Write File	Upload	Download	
	1	Compare	All Copy <<	>> All Copy	Compare	
Properties		File Configuration			Device Configuration	
Description	CHG	SN0000001	<	>	CHG	
Tag No.	CHG	LDY-Sample-001	<	>	CHG	
Sensor Type		0 to 20 mA			0 to 20 mA	
Sensor Wires	CHG	2 Wires	<	>	2 Wires	
Sensor Unit		mA			mA	
PV Upper Range	CHG	20.000	mA	<	>	20.000
PV Lower Range	CHG	4.000	mA	<	>	4.000
PV Damping	CHG	0.000	Sec	<	>	Sec
Transfer Function	CHG	LINEAR	<	>	CHG	
Low cut function	CHG	OFF	<	>	CHG	
Low cut Point	CHG	2.000	%	<	>	%
AO Type	CHG	0 to 20 mA	<	>	CHG	
AO Upper Range	CHG	20.000	mA	<	>	CHG
AO Lower Range	CHG	4.000	mA	<	>	CHG

M3LDY PC Configurator

2.11.3. データの設定変更

“CHG” ボタンで、各領域にある当該データを変更することが出来ます。値を変更すると当該データの背景色が“Light Yellow”に変わります。“CHG” ボタンが複数項目にまたがっている場合、これらのデータは一括して変更することを示しています。

“>” や “<” で各項目のデータを領域間でコピーすることが出来ます。コピーで値が変わった場合、当該データの背景色が“Light Yellow”に変わります。図 1 6 に例を示します。

“All Copy <<” ボタンを押すと、“Device Configuration” 領域にあるデータを一括して“File Configuration” 領域にコピーすることが出来ます。変化のあったデータの背景色は“Light Yellow”になります。

“>> All Copy” ボタンを押すと、“File Configuration” 領域にあるデータを一括して“Device Configuration” 領域にコピーすることが出来ます。変化のあったデータの背景色は“Light Yellow”になります。

図 1 6 データ変更時の画面

Exit	Page	Read File	Write File	Upload	Download			
	1	Compare	All Copy <<	>> All Copy	Compare			
Properties		File Configuration			Device Configuration			
Description	CHG	SN0000001		<	>	SN0000001	CHG	
Tag No.	CHG	Test		<	>	LDY-Sample-001	CHG	
Sensor Type		0 to 20 mA				0 to 20 mA		
Sensor Wires	CHG	2 Wires		<	>	2 Wires	CHG	
Sensor Unit		mA				mA		
PV Upper Range	CHG	10.000	mA	<	>	20.000	mA	CHG
PV Lower Range	CHG	0.000	mA			4.000	mA	
PV Damping	CHG	0.000	Sec	<	>	0.000	Sec	CHG
Transfer Function	CHG	LINEAR		<	>	SPECIAL_CURVE	CHG	
Low cut function	CHG	OFF		<	>	ON	CHG	
Low cut Point	CHG	2.000	%	<	>	2.000	%	CHG
AO Type	CHG	0 to 20 mA		<	>	0 to 20 mA	CHG	
AO Upper Range	CHG	10.000	mA	<	>	20.000	mA	CHG
AO Lower Range	CHG	0.000	mA			4.000	mA	CHG

M3LDY PC Configurator

2.11.4. データの比較

“ File Configuration ” 領域と “ Device Configuration ” 領域にあるコンフィギュレーション情報を比較することが出来ます。

“ Device Configuration ” 領域の “ Compare ” ボタンを押すと、“ File Configuration ” 領域のデータとの比較を行い、異なるデータはその背景色が “ Med Pale Red ” で示されます。

図 1 7 参照。

“ File Configuration ” 領域の “ Compare ” ボタンを押すと、“ Device Configuration ” 領域のデータとの比較を行い、異なるデータはその背景色が “ Med Pale Red ” で示されます。

“ Description ” データは、比較の対象ではありません。

図 1 7 データ比較後の画面

Properties	File Configuration				Device Configuration			
Description	CHG	SN0000001		<	>	SN0000001		CHG
Tag No.	CHG	LDY-Sample-001		<	>	LDY-Sample-201		CHG
Sensor Type		0 to 20 mA				0 to 20 mA		
Sensor Wires	CHG	2 Wires		<	>	2 Wires		CHG
Sensor Unit		mA				mA		
PV Upper Range	CHG	20.000	mA	<	>	20.000	mA	CHG
PV Lower Range		4.000	mA			4.000	mA	
PV Damping	CHG	0.000	Sec	<	>	0.000	Sec	CHG
Transfer Function	CHG	LINEAR		<	>	SQRT		CHG
Low cut function	CHG	OFF		<	>	ON		CHG
Low cut Point	CHG	2.000	%	<	>	1.000	%	CHG
AO Type	CHG	0 to 20 mA		<	>	0 to 20 mA		CHG
AO Upper Range		20.000	mA			20.000	mA	
AO Lower Range	CHG	4.000	mA	<	>	4.000	mA	CHG

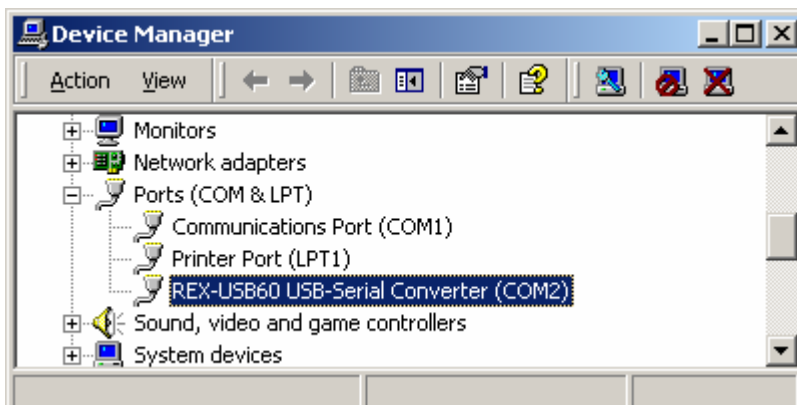
2.12. トラブルシューティング

2.12.1. COM ポートのコンフィギュレーション

本ツールでは、COM ポート番号として 1 ~ 2 を用いることができます。対応する COM ポートにカードを正しく接続したのに、M3LDYCON 起動時または Connect 時に、Configuration Error が発生し、接続できないことがあります。多くの場合の原因は Windows システムが対応する COM ポートを認識していないか、または Agilent IO Control プログラムに対応する COM ポートが設定されていないかのいずれかです。特に、USB 等を用いる場合には、COM ポートはダイナミックに設定されますので、Agilent IO Control プログラムに対応する COM ポートが設定されていない場合が多々あります。一度正しく設定すれば記憶されますが、設定時には動作している必要があります。従って通信ができない場合には、設定が正しいか否かの確認が必要です。ここでは例を用いて、確認と設定方法を説明します。仮に USB-Serial Converter を用いて COM ポート 2 に接続するとします。

- (1) USB-Serial Converter をインストール後、デバイスマネージャでハードウェアのコンフィギュレーションが正常であることを確認します。図 1 8 - 1 にその例を示します。COM ポート 1 および 2 にハードウェアが正常に接続されていることがわかります。更に USB-Serial Converter が COM ポート 2 に正常にコンフィギュレーションされていることがわかります。

図 1 8 - 1 デバイスマネージャ



- (2) プログラム Agilent IO Libraries / IO Config ツールを起動します (図 1 8 - 2)。起動すると図 1 8 - 3 のような画面が表示されます。

図 1 8 - 2 IO Config ツール起動

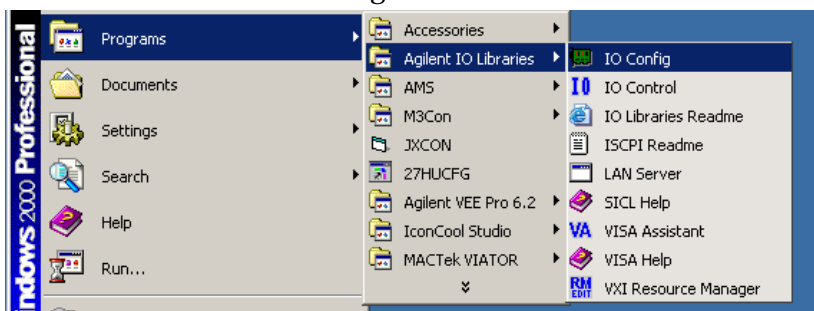
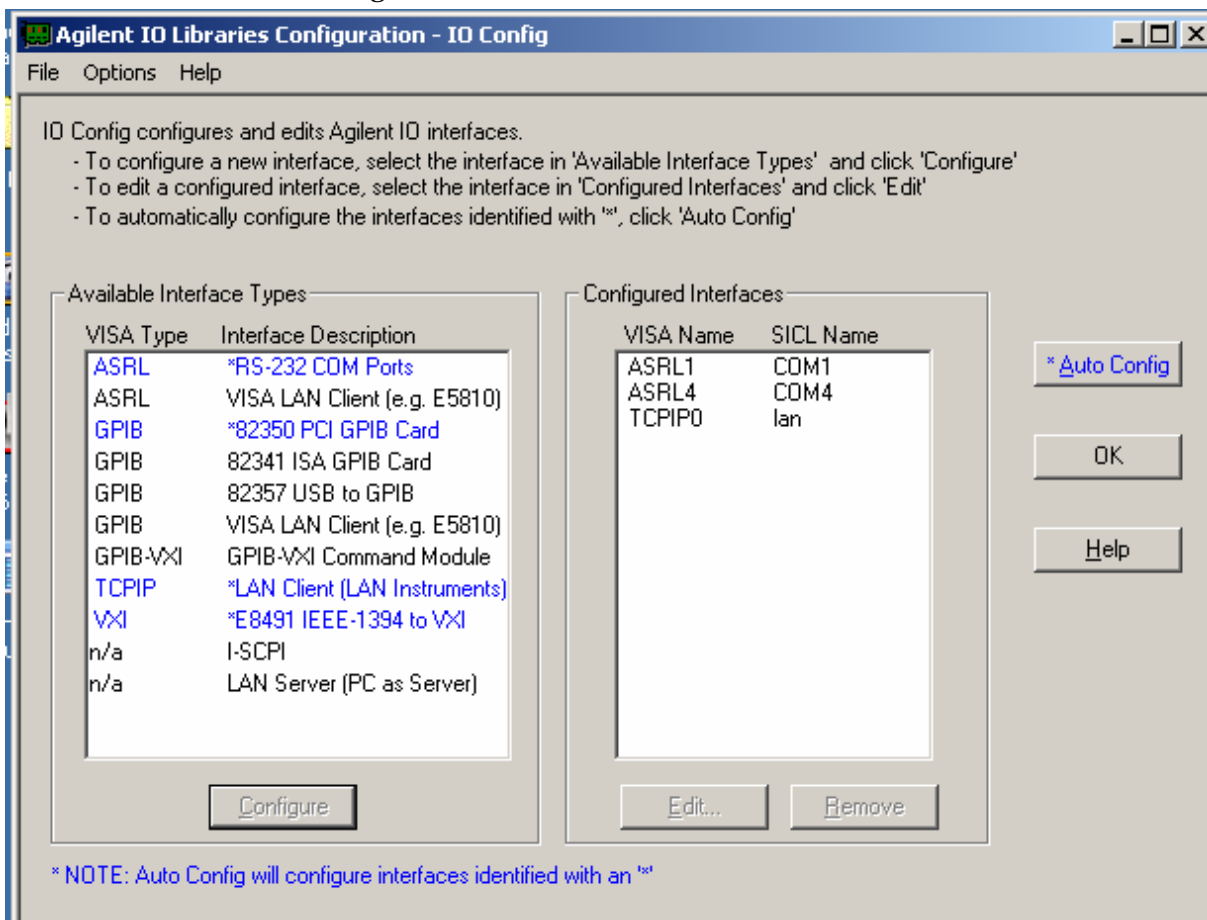
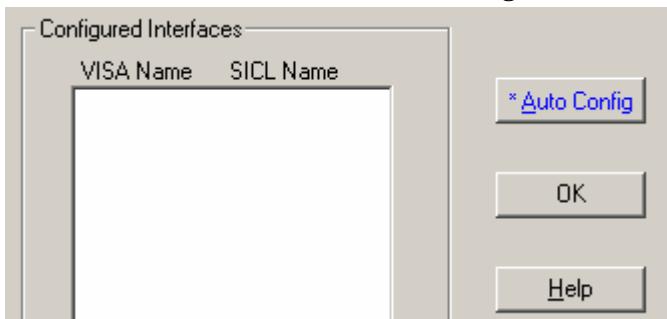


図 1 8 - 3 IO Config 画面



(3) Configured Interfaces のすべての COM デバイス(SICL Name が COMx となっているもの) を選択し、Remove します。Configured Interfaces のリストからなくなります。

図 1 8 - 4 Remove 後の Configured Interfaces



- (4) “Auto Config”ボタンを押します。現在使用可能な COM デバイスがコンフィギュレーションされます。図 1 8 - 5 で COM1,2 が Configured Interfaces にありますので、COM1,2 が Agilent IO Control プログラムに正しく設定されていることが確認できます。これにより、COM ポート 2 に接続した USB-Serial Converter を用いて、M3LDY と接続することが可能になります。

図 1 8 - 5 再コンフィギュレーション後の IO Config 画面

